

## 国語問題

〔問題一〕次の各文の――を付けた漢字の読みをひらがなで書きなさい。

- (一) 被害が及ぶ。
- (二) 日々の努力を怠る。
- (三) 装飾を施す。
- (四) 運命に翻弄される。
- (五) 国の版図を広げる。

〔問題二〕次の各文の――を付けたカタカナの部分に当たる漢字を書きなさい。

- (一) 判断を親友にユダねる。
- (二) 祝典がオゴソかに始まる。
- (三) 衣類をダンスにシュウノウする。
- (四) ユウビン物がポストに届く。
- (五) 時代のチョウリユウを見極める。

〔問題三〕次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

人類は長い間、狩猟採集生活で暮らしてきた。これは、動物を狩猟し、食べられる植物を集めて、自然の恵みを取って食べていく生活である。私たちヒトはホモ・サピエンスである。ホモ・サピエンスが進化したのは、およそ二十万から三十万年前だ。サピエンスと同じホモ属に分類される人類が出現したのは、およそ二百万年前だが、それよりもずっと前から、人類は狩猟採集で暮らしを立ててきた。

二一世紀の現在、本当に狩猟採集だけで生計を立てている集団は、もはや存在しない。しかし、一九七〇年代ごろまでは、国民国家の枠内に組み入れられる度合いも少なく、<sup>①</sup>狩猟採集で暮らしている集団は、世界中にいくつか存在した。彼らの生活でさえも、人類史の中でみんなが行っていた狩猟採集生活とは言い難い。<sup>がた</sup>なぜなら、そのような狩猟採集民たちは、良くも悪くも、周辺に押し寄せる農耕民や牧畜民とさまざまな関係を持ちながら狩猟採集をしてきたからだ。

それでも、古い貴重な記録や、曲がりなりにも現在でも狩猟採集で生計を立てている人々の人類学的記録がある。カラハリ砂漠をはじめとするアフリカ各地、シベリアやカナダの北極地方、南米のアマゾンや東南アジアに住む人々だ。それぞれが住んでいる生態学的環境の違いにより、食べ物も異なれば、生計活動に必須な知識も異なる。しかし、おおまかに言って、大型動物の狩猟は男性の仕事、植物食の採集は女性の仕事、という性的分業がある。

狩猟採集民の社会に、性的分業があることはよく知られている。それをもって、先進国を含む多くの現代社会に見られる、働く夫と専業主婦の関係や社会的な男女差別を説明しようとする論がある。しかし、それは大間違いなのだ。大型動物の狩猟には、長い追跡と最後の持久戦と投擲による殺害が必要である。<sup>とうてき</sup>\* パースコントロールのない社会において、女性は、つねに乳飲み子をかかえていることが多い。そんな状態で大型動物の狩猟にたずさわることは、<sup>②</sup>エネルギー的に割が合わないのではないだけのことだ。

大型動物の狩猟はめったに成功しないので、日々の食料は、女性たちがこつこつと集めてくる植物食でまかなわれている。<sup>A</sup>、女性の貢献がどれほど大きいかは、誰もが理解している。そして、小動物であれば女性も狩猟するし、男性も植物性の食物を持って帰ることもある。性的分業はあるものの、そこに優劣の概念はないのだ。

また、大型動物の狩猟には、男性全員が行くこともないし、毎日行くこともない。男性がキャンプに残っていることは多く、そのような男性は、いわゆる家事・育児におおいかかわっている。ミルクを分泌するのは女性だけなので、授乳は母親がするしかない。しかし、離乳した子どもたちの世話は誰でもできる。その仕事は、キャンプに残っている全員が担っているのだ。<sup>にな</sup>

それにしても、大型動物が仕留められると、それは大変に貴重な食物だ。狩猟採集民は、それをキャンプに持ち帰ってみんなで分ける。狩猟は技術的に難しい仕事であり、個々の男性間に得手、不得手がある。何度も大物を仕留められる男性もいれば、まったくできない男性もいる。<sup>B</sup>、狩猟採集民は、そこにあえて格差を作らないようにしている。自分の技量のすばらしさを威張る行為は非難される。最終的に獲物を仕留めた男性の家族には、獲物の一番おいしいところは配らないようにする。仕留めた栄光は、仕留めた男性だけにあるのではなく、使われた矢尻が良かったからだという説明をする。そして、矢尻は、みんなで貸し借りするので、仕留めた栄光がいろいろな男性の間に分散することになる。

狩猟採集民は、なぜこのように平等主義的に振る舞うのだろう？ それは、彼らが一人では決して十分な食料を得ることができず、同性どうしも、男女間でも、共同して働いて初めてみんなが生きていけるのだ、ということをよく認識しているからだ。そして、いかに狩

猟が上手な男性といえども、病気になるったり、負傷したりで狩りに行けない日は、年間の四分の一以上になるのだ。こんな災難は誰にでも降りかかる。そんなことをみんながよく認識しているからこそ、個人の技量よりも、みんなで分かち合うことに重きを置く。

食料を調理するために火を焚かねばならないので、どこか一カ所にキャンプを置いて炉を作る。そのまわりに、寝るためのさしかけ小屋を作る。一つのキャンプに何人の人たちが暮らすかは、キャンプ周辺の土地でどれほどの食料が取れるかによる。たくさん取れるときには、大勢が集まることもあるが、たいていは数人から十数人ほどだ。集まる人々は、カップルと子ども、それぞれの血縁者、そして、非血縁の友人たちだ。キャンプに一緒にいるときは、みんなで共同作業をし、食物を分配する。しかし、その場所の食料が少なくなったり、または何らかのいざこざが起きたりすると、人々は別れて分散する。彼らの生活は、そんな離合集散の生活だ。

そんな風に、一緒に暮らす人々の集まりをバンドと呼ぶが、そこには、全体を率いる首長のような権力者は存在しないし、権力構造もない。食料の獲得だけでなく、矢尻や罾などを作る、入れ物を作る、葉になる植物を集める、さしかけ小屋を作る、お祭りをするなど、やるべき仕事の種類はたくさんあり、そのどれかに長けているとみなされる人は、その点で尊敬されたり頼られたりするが、それが特権にはつながらない。

このような社会で、誰と誰がカップルになるかは、大体において、当地人たちの好みが優先される。親などの上の世代の人間が、息子や娘などの下の世代の結婚を決めることもあるが、本人たちが気に入らなければ、その結婚関係は解消される。文化人類学者のレヴィ＝ストロースは、かつて、「結婚とは、男性の親族集団の間で、女性を分配する取り決めである」と言った。それも一理はあるのだが、それは、農耕・牧畜社会からあとのことだ。<sup>③</sup> 狩猟採集民では、女性はまだ「分配される」だけの財ではなく、もっと主体的に暮らしている。

(長谷川眞理子『私が進化生物学者になった理由』より)

(注) バースコントロールⅡ妊娠・出産を制限すること。

(二) ——線部①「狩猟採集で暮らしている集団」を表す最も適当なことを、本文中から三字で抜き出さない。

(二) ——線部②「エネルギー的に割が合わない」とは、どういうことですか。次の中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 出産・育児に多大な労力を費やしている女性にとって、大型動物の狩猟にかかわるエネルギーは残っていないということ。

イ 大型動物の狩猟にかかわるよりも、出産・育児という女性だけの特権的な仕事にたずさわることのほうが重要だということ。

ウ 大型動物の狩猟には時間と身体面で多大な労力がかかるため、授乳をしながらそれに参加することは効率が悪いということ。

エ 女性が出産・育児にかかる体力を補給するには、採取した植物食よりも狩猟した動物食を摂るほうが効率が良いということ。

(三) 

|   |   |   |
|---|---|---|
| A | ・ | B |
|---|---|---|

に入る語の組み合わせとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア (A) なぜなら B ところが

イ (A) だから B しかし

ウ (A) つまり B ゆえに

エ (A) そして B たとえば

(四) ——線部③「狩猟採集民では、女性はまだ『分配される』だけの財ではなく、もっと主体的に暮らしている」とありますが、ここで筆者が述べようとしていることとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 狩猟採集民の女性たちは、集団を維持するための貴重な財として尊重されているため、結婚相手を選択するうえで個人の好みが尊重されるだけでなく、出産・育児において主体的な役割を果たしていることで尊敬や信頼を得られるということ。

イ 狩猟採集民の女性たちは、男性と同じく個人としての意思が尊重されるため、好みの結婚相手が見つかるまで何度でも異なる男性と結婚関係を結べるだけでなく、食料の獲得などの仕事においても自身の得意なものを選択することができるということ。

ウ 狩猟採集民の女性たちは、集団内で価値の高い存在であるため、財としての役割を担う結婚の選択において自身の意見が最大限に尊重される一方で、出産・育児においてキャンプにいる男性を指導・監督する責務を負っているということ。

エ 狩猟採集民の女性たちは、誰と恋人関係になるのかという選択において自身の好みが優先されるだけでなく、父母や年配者などの意向が反映されることの多い結婚関係においても、誰と結婚するかは最終的に個人の意見が尊重されるということ。

(五) 次の一文は本文中のある段落の最後にあつたものです。これを元に戻すのに最も適当な段落を探し、その段落の最後の十字を抜き出さない。(句点も字数に含めます)

ところが、だからと言って彼らの社会に、男性の方が偉い、または女性の方が偉い、という上下関係はないのだ。

(六) 本文の説明の仕方として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 狩猟採集民の社会と農耕・牧畜社会の集団内における権力の構造に焦点を当てて比較しながら、狩猟採集民の生活において性的分業があるのはなぜかを客観的に説明している。

イ 現代社会における社会的な男女差別や権力者を生み出してしまう権力構造を批判するため、狩猟採集民の生活において平等主義が浸透していた理由を歴史的な資料を用いて説明している。

ウ 狩猟採集民の性的分業は現代の一般的な性差についての概念とは異なることを明らかにしながら、そこでの生活や社会構造がどの

ようなものであったかを具体的な例をもとに説明している。

エ 現在ではすでに消滅してしまった狩猟採集民がどのように生計を立てていたのかに着目しながら、筆者が探し出した文献とさまざまに分野の専門家の意見を交えて説明している。

(七) 本文中で筆者は、狩猟採集民が男女間の差別や同性間の格差をつくらないのはなぜだと考えていますか。本文中のことはを用いて、六十字以内で答えなさい。(句読点も字数に含めます)

〔問題四〕次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

二十年以上前に実家を出た新塚美海子<sup>にいづかみみこ</sup>は夫と娘の三人暮らしです。父が数年前に亡くなり、ひとり暮らしになった母がシニア向けのマシオンに引っ越すのを機に、母と美海子、姉の百々子<sup>ももこ</sup>、弟の陸郎<sup>りくろう</sup>の四人は、実家を解体し更地にして売りに出すことに決めました。

実家を取り壊されるのを、新塚美海子はひとりで見にいった。取り壊しの期間は約一週間、大雨や暴風になる可能性も見越して多めにとつてあるから、問題がなければそれより早く終わる、と美海子は姉の百々子から聞いていた。毎日仕事を休んで見に行くことはできないから、<sup>①</sup>取り壊しの日目、有給休暇をもらって見に行くことにしたのである。

正月もあつという間に過ぎてしまい、年明けから二週間ほどしかたつていないのに、町は通常運転だ。電車を乗り換えて実家の最寄り駅までいき、駅から続く商店街をぶらぶら歩く。年末にもきたばかりなのに、今日から家を取り壊されるという感傷からか、目の前の光景に、子どものころの記憶が重なる。お年玉を握りしめて走ったおもちゃ屋さんも、学校帰りに買い食いたいたい焼き屋さんも今はもうないのに、はつきりと目に映る。

実家にたどり着くと、解体作業はもうはじまっている。家は白い防音用のシートで覆われているが、隙間からなが見える。ショベルカーが壁を崩し屋根を崩し、離れた場所から業者が放水している。美海子は、近くにいた作業員に声を掛け、差し入れ用にとコンビニエンスストアで買ったホットドリンクを渡し、見学の許可をもらう。

きつと泣いちやうから、見にはいかなないと百々子は言っていたが、泣くような気持ちに美海子はならなかった。真つ青な空を背景に、見慣れた家がどんどん壊されていくさまは圧巻だった。屋根が崩され、青空の分量がどんどん多くなるにつれ、母親が用意したさまざまな食事が思い出された。数か月前に片づけにきたときに、昔の家計簿を見たせいだろう。基本的に、食卓はいつも茶色っぽかった。野菜と缶詰<sup>かんづめ</sup>を使った、どことなくさみしい料理が続いた時期も美海子は覚えているし、陸郎が育ち盛りになるとかさ増し料理が増えた。オーブンレンジを新製品に買い換えたときは、ローストポークや鶏と野菜のグリルといった、専用レシピ本を参考にした、しゃれた料理がこれでもかというくらい続き、百々子と美海子は歓声を上げたものだった。

「家が壊されるのを見ながら、食べたものを思い出すなんておかしいよね。雨漏りとか、お風呂の扉が開かなくなるとか、思い出はもつといういろいろあるのにね」

母親の暮らすシニアマシオンのカフェテリアで、老いた母と向き合つて美海子は話す。

「でもさ、五人で囲んだ食事なんて、本当にちよつとだよね。陸郎が中学に上がったときには百々子はひとり暮らしをはじめたし。あんたたちがいるときは、たいへんだつたけど料理もしいがあつた。とうさんと二人になってからは、作りがいがなかったわねえ。ひとりになってからは、もう、料理すら億劫<sup>おっくう</sup>で、できあいをよく買った」と、引っ越してから妙に若返つたような母が笑う。

<sup>②</sup>「そんなもんかしらね」今まさに、毎日の家族の食事に追われている美海子はつぶやく。娘の雛<sup>ひな</sup>は、太るといつて揚げものは拒否するし、夫の準<sup>じゅん</sup>一は煮魚や野菜料理がメインだと夜中にカップラーメンを食べる。三人家族だけれど、朝と夜に何を食べるかでいつも頭を悩ませている。ひとりならどんなに楽だろう、好きなものを好きなだけ食べたり食べなかったりできるのにと、美海子はいつも考えているのだった。

「あんたもいつかわかるわよ、ザーつと先のいつかにはね」母はうたうように言い、「更地になった土地、もし見に行くなら誘つてよ」と、ふと身を乗り出して美海子に笑いかける。

<sup>③</sup>更地になったもと実家を、約束どおり、美海子は母といっしょに見に行くことにした。百々子も誘つてみたが、さみしくなるかもしれないからいけない、という返事だった。

仕事が休みの土曜日に、美海子は駅からタクシーに乗つてシニアマシオンまで母を迎えにいき、そこから実家を目指した。母はピクニックにでもいくような四角いアウトドアバッグを用意していて、「お茶とかいろいろ入ってる」と言つて美海子に渡す。

タクシーで十五分ほど走ると、もと実家に着いた。会計をすませてタクシーを降り、「おおお」とつい美海子は声を上げた。

「あんらまあ」と、隣に立つ母も、素<sup>す</sup>つ頓<sup>とん</sup>狂<sup>きやう</sup>な声を出す。二人で顔を見合わせて、笑い出す。

「みごとになんにもない」

「こんなに広い土地だったかねえ」

住宅街のそこだけ、歯が抜けたみたいになんにもない。売り地の看板がぼつりと立っているだけだ。壊されているときは、家族で囲んだ食事が次々と思ひ浮かんだ美海子だが、これだけなんにもないと、ここに家があつたということもうまく思い出せない。

「お茶にしよう」母が言い、躊躇なく空き地に入っていく。「ほら、荷物持ってきて」

「いいの？ 勝手に入って」アウトドアバッグを持ってA ついていくと、

「だってまだだれも買っていないだろ？」と言いながら母はバッグを開け、ピクニックシートを広げる。ステンレスボトルやビニールに包まれた何かを取り出していく。四合瓶の日本酒も出てきたので美海子はB するが、母はそれを持って空き地内を歩き、四隅に酒をかけている。

「それ、何かの儀式？」戻ってきてピクニックシートに座る母に、美海子は訊いた。

「家建てる前の\*地鎮祭でね、お供えしたお酒やお塩を、四方にまいたんだよ。やりかたを教わって、そのとおりに。よろしく願いますってことじゃないのかね。だから今日は、今までありがとうございましてご挨拶。お酒だけけど」母は言い、ビニールから保存容器やアルミホイルを取り出す。容器の中身はお新香で、アルミホイルはおにぎりだった。

「寒くなったら、あったかいお茶もあるから」アルミホイルをむいて、おにぎりにかぶりつきながら母が言う。「こうまでなんにもないですががしいね」

美海子もおにぎりに手をのばす。湿った海苔とかすかな塩味がなつかしい。中身は焼きたらこだった。空は高く、雲ひとつなく晴れている。風は冷たいが、ふりそそぐ日射しはあたたかい。

「この土地を見に来たときもなんにもなかった。狭いのか広いのかわかんなくて、とうさんと二人で、棒きれで間取りを書いて、お風呂はこことか、茶の間はこことか、やったなあ」なんにもない地面を見つめて母が言う。子どものいない、まだ若い夫婦の姿が美海子にも見えるようだった。「とうさんもおうちも、役目を終えたんだね。役目を終えられるってのはしあわせだね。終えられない人もものごとくも、あるわけだからさ」だれに言うでもなく、母はつぶやく。かなしくもさみしくもないのに、美海子はふと泣きそうな気分になり、あわてて青い空を見上げる。

(角田光代『青空の下の食卓』より)

(注) 地鎮祭＝建築工事の前に、その土地の神をまつり、工事の無事を祈る儀式。

(一) ——線部①「取り壊しの一日目」とありますが、取り壊しの日が過ぎたあとの美海子の気持ちとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 現在と異なる子どもたちの商店街の風景や、取り壊しの現場を見ながら昔の実家の食卓に並んだ母の料理の記憶が呼び覚まされて、しみじみとする気持ち。

イ 実家の屋根が取り壊されるときに見えた青空の鮮やかさとかつて母が作った料理の記憶の曖昧さとの対照性に驚き、実家への感傷がより強まる気持ち。

ウ 実家が取り壊されていく様子を見ながら、子どもたちの商店街や実家で起こったさまざまな出来事の光景が混じり合うことに、不思議さを感じる気持ち。

エ 実家が取り壊される状況とそのときに思い出された家族との記憶をありのまま母に話したにもかかわらず、実家への関心が薄い母の鈍感さにいら立つ気持ち。

(二) ——線部②『そんなもんかしらね』今まさに、毎日の家族の食事に追われている美海子はつぶやく」とありますが、このときの美海子の様子として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア かつての母がどのような気持ちで家族の食事を用意していたのかを初めて知り、現在の自分と似たような家族の悩みを母も抱えていたことに慰められて、日々の生活に対して前向きな気持ちになっている。

イ 父が亡くなり単身で生活するようになった母が、一人で食事をすることの気軽さについて語るのを聞き、自分もいつかは食べたいもののことだけを考えて料理ができる日が本当に来るのだろうかと不安になっている。

ウ 家族のために毎日何を食べるかで悩んでいる自分の状況を気遣うこともなく、一人で食事をする機会が増えて、料理をすることがめっきり減ったことをあつからんと語る母の無神経さにあきれている。

エ 家族のために食事を用意していたときの大変さとやりがい語る母の言葉に、苦労しながら家族の食事を用意している現在の自分とを照らし合わせて、共感できる部分とそうでない部分とが入り混じっている。

(三) ——線部③「更地になったもと実家」とありますが、更地になった状態を見た母の様子として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 想像していた以上に実家の土地が何もない状態になっていることがおかしく、当時の面影を残すものがなくなったことに、不思議とさわやかな気持ちになっている。

イ 更地になったことで建物が建っていたときには感じることもなかった土地の広さに驚くとともに面白くなり、そうした感情をもつほど実家への思いが薄れてきている。

ウ 若い夫婦として建物の建っていない実家の土地を見に来たときと同じようにすべてが元の状態に戻ったことで、まっさらな気持ちで新たな一歩を踏み出そうとしている。

エ 自分たちの住んでいた土地が何もない状態になったことで、ここに新しい家族が住み始めて自分たちと同じようにかけがえのない時間を過ごすのだろうと想像している。

(四) 

|   |   |   |
|---|---|---|
| A | ・ | B |
|---|---|---|

 に入る語の組み合わせとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア (A) いそいそ      B    ぎくつと)  
イ (A) おずおず      B    ぎよつと)  
ウ (A) こわこわ      B    さめざめと)  
エ (A) しずしず      B    ま(まこと)

(五) 本文中の美海子と母の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 美海子は、家の取り壊しの日に実家へ足を運ぶ責任感の強さと、母と更地を訪れたときに自らの過去の記憶を鮮明に思い出すほどの想像力をもつ人物として描かれている。

イ 美海子は、実家の取り壊し作業を淡々と見るほどの落ち着きと、更地となった実家を訪れた際に過去の父母の姿を思い浮かべる豊かな感受性をもつ人物として描かれている。

ウ 母は、三人の子どもを育て上げて、父が亡くなるまで家族に尽くした献身性と美海子の悩みを聞いてさりげなく助言をする心優しさをもつ人物として描かれている。

エ 母は、一人暮らしになってからすぐにマンションに引越すほどの思い切りのよさと、更地になった実家の土地に日本酒を供えるほどの信心深さをもつ人物として描かれている。

(六) ……線部「とうさんもおうちも、役目を終えた」とありますが、母はどのようなことを通して、実家の役目が終わったと考えたのですか。六十文字以内で答えなさい。(句読点も字数に含めます)

〔問題五〕 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

ヨーロッパの諸語も東アジアの諸語も、基本的には声<sub>かきこえ</sub>＝音声を基盤として成り立っています。そこにちがいはありません。しかし、言葉は単に 言<sub>はなしことば</sub> だけで ① 成立しているのではなく、 文<sub>かきこえ</sub> を有し、両者の ② 複雑な関係のうえに成り立っています。この 文<sub>かきこえ</sub> との関係が、発音記号のごとき ③ 西欧アルファベット諸語と、東アジア漢字文明圏の諸語とは、根本的に異なっています。

発音記号のようなアルファベットで表記する西欧諸語は、声を基盤とした言語の姿を変えていません。これに対して、漢字という、一字が即、一語である文字をもつ東アジアでは、わずか二字で新しい熟語ができるほどの、あまりにも圧倒的な語彙数によって、表現力の高い 文<sub>かきこえ</sub> の造語力が 言<sub>はなしことば</sub> の表現を凌いでいます。生活や労働、支配のなかから必然的に生まれてくるわずかな 言<sub>はなしことば</sub> の語彙よりも、漢字相互の結合によって次々と新しい語彙がつくりあげられています。その漢字＝漢字語の造語力を基盤に 文<sub>かきこえ</sub> が 言<sub>はなしことば</sub> をつくるという、西欧アルファベット諸語にはありえない構造までつくりあげられています。それゆえ、今でも韓国や北朝鮮、中国のテレビからは日本語でも ア通じ<sub>あとおほ</sub>る漢字語がわずかな発声のちがいで聞こえて イ<sub>い</sub> きます。

中国、朝鮮半島、ベトナム、そして日本に共通の漢字語が成立しているのはそれゆえです。なぜなら、表音文字であれば発音が 変<sub>かわ</sub>われば綴りも変わりますが、表意文字である漢字の場合は、周辺各「国」において中国とは異なる読みや用法が 採<sub>え</sub>られたとしても、文字そのものと字義は保持されるからです。西欧アルファベット文明圏の声中心の諸語と東アジア漢字文明圏の文字中心の諸語とは、この点において言語構造が大きく異なっています。

英語があつて、これをアルファベットで書く。 ④ それと同様に、日本語があつて、これを漢字・ひらがな・カタカナで書く。それは漢字で書いてもいいし、ひらがなで書いてもいい、またカタカナで書いてもいい——という考えはまちがいです。

日本語があるのではなく、漢字語とひらがな語とカタカナ語、この三つが混じり合った言語、これに日本語という名前を付けているだけ——これが正しい理解です。漢字は漢字語、漢詩、漢文とともに、ひらがなはひらがな語と和歌と和文とともにありつづけているのです。

(石川九楊『日本論 文字と言葉がつくった国』より)

(一) ———線部①「成立し」と同じ活用形の動詞を、本文中の——線部ア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

(二) ———線部②「複雑な」と、——線部が同じ品詞になっているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 海岸で小さな石を拾う。  
イ いろんな言語を学ぶ。  
ウ おもむろに話し出す。  
エ 真実が明らかになる。

(三) ———線部③「西欧」と熟語の組み立てが同じものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 国連  
イ 往復  
ウ 既成  
エ 骨折

(四) ―線部④「それと同様に、日本語があつて、これを漢字・ひらがな・カタカナで書く」とありますが、この一文の中から、付属語をそのままの形ですべて抜き出さない。

(五) ……線部「中国、朝鮮半島、ベトナム、そして日本に共通の漢字語が成立している」とありますが、東アジアで共通の漢字語が成立する理由を説明した次の文の□に入る最も適切なことばを、それぞれ本文中から、①は七字、②は十五字で抜き出さない。  
(読点も字数を含めます)

漢字は、□①の文字であるため、東アジアの各国が中国と異なる読みと用法で漢字を用いていても、□②から。